

水族館でくらのソプラノの泣声

どいつもかしこも現実なんです

藤ほとる 神奈川県

→作者はくらの声、しかも、「泣声」という感情が含まれた声を聞き取ることができた。しかしくらには鳴き声も、おそらく感情もない。下句「どいつもかしこも」というねじれからも、作者の感じ取っている「現実」の危うさを思う。

抱きしめられて

自分の幅を知る

あお 奈良県

→人とは他者と触れ合うことで自分を知っていく。抱きしめられる前にも「自分の幅」を知る機会はいくらでもあった。だが、恋人もしくは思い人に触れられて初めて知った自分を感じた瞬間。あなたを通してしか知りえない自分の姿。

湯豆腐を割って静寂から啜る

さいう 愛知県

→「から」が効いている。湯豆腐の成分に静寂はないのだけれど、寒い日の湯豆腐と自分という存在が際立つ。二句目の「割って」に、豆腐の白い断面から溢れる静寂。どんな味だったのだろうか。

お前の背丈を思い出すから

つり皮がつかめない

尚 東京都

→失恋後、共に歩いた場所や入った店などに一人でいると現実にくらっとくることはある。心が認識する前に目の当たりにする現実。おそらく「お前」はちょうどつり革をつかんで曲げた腕の中にすっぽり入るくらいの背丈だったのだろう。自分の身体の感覚さえも「お前」を失った感覚に繋がってしまう。

玉ねぎ切る私の体で泣く亡友

長谷川柊香 宮城県

→玉ねぎを切る際涙が出るのは「硫化アリル」という辛味成分が目や鼻の粘膜を刺激するから。私たちは身体を持っている限り生理現象に翻弄される。この涙も作者が悲しいからでは

ないが、ふとかつて亡くした友人のことを思い出す。身体を亡くした友人は、自分を通して泣いているのかもしれない。

観覧車から街を眺める心地する

姉のつむじをひさびさにみて

折田 日々希 神奈川県

→やや説明的ではあるが、見慣れたもの、近い存在への感傷を詠んだ良い作品。

いつもとは違う目線で眺める街がふいに知らない場所に見える。「姉」という見上げる存在だった人の背丈をいつの間にか追い越していることに気付い。私たちが知っていると思うだけで、

卵割りますか命が出てきます

当たりは命が二個ありますよ

猫谷圭希 広島県

→ほとんどの人は卵は食べ物という認識でしか見ない。しかし私たちが食べているのは命。野菜も米も肉も、人間に食べられるためではなく、生きるために存在しているもの。この作品はあえて舌足らずな印象を詠み手に与え、意志の疎通ができないような不気味さを感じさせる。私たちが命を食べ物と認識しているように、何者かから命ではなく食べ物として扱われる日が来てしまうかもしれない。